

リスクコミュニケーションがリスク認知に及ぼす影響

The Effect of Risk Communication on Risk Perception

○中村道子*・藤原誉久*¹・中浦俊一郎*²・牧迫美穂子*³・野川由紀*⁴

(専門学校新国際福祉カレッジ*・上川病院*・町田市医師会訪問看護ステーション*²・専門学校日本工学院*³・帝京大学*⁴)

NAKAMURA Michiko, FUJIWARA Yoshihisa, NAKAURA Syunichiro, MAKIZAKO Mihoko, and NOGAWA Yuki
(New International College of Welfare, Kamikawa Hospital, Machida City Medical Association,
Nihon Kogakuin College, and Teikyo University)

keywords: risk communication, risk perception, inter-professional collaboration

目的

介護や医療などの臨床では、職種によりリスクを捉える視点(以下、リスク認知)が異なることが多く、その視点の違いが思わぬ事故につながる場合もある。患者に関わる多職種が連携し事故を軽減するには、リスクをマネジメントするだけでなく、主観的なリスク認知の違いに着目したリスクコミュニケーションが有効であると言われているが、リスクコミュニケーションを行うことでリスク認知がどのように変化するかを検討した実践的な報告は少ない。

そこで本研究では、ベッド周辺環境の事例を用いたリスクコミュニケーションから得たリスク認知の視点が、他のベッド事例に般化するか、また車いす介助という異なる事例に転移するか否かを検討した。

方法

参加者 14名が参加した。遅刻早退者2名とスタッフ6名を除外し、一般参加者7名(作業療法士5名(うち学生3名)介護福祉士2名)の結果を分析の対象とした。

刺激と記録用紙 福祉用具安全確認トレーニング研修キット(有限会社サテライト社製)から3枚の図版を用いた。ベッド上での介助場面を描写したNo.8図版をテスト刺激、No.12図版を訓練刺激として使用した。車いす介助場面については、No.6図版をテスト刺激として用いた。リスクと思われる状況、4段階のリスク評価、危険度の順位、今後の対応を記入する欄が設けられた記録用紙を用いた。

従属変数 自由記述形式で参加者が挙げたリスクと4段階のリスク評価。

観察者間一致率 参加者の回答内容を評価者2名がそれぞれ分類し一致率を求めたところ、ベッドの事例では67%、車いすの事例では68%だった。その後、分類方法を検討し直し、再度評定したところ、それぞれ100%の一致率となった。

手続き 本研究は、3つのフェイズから構成された。

1) プレテストフェイズ No.8図版を参加者に提示して、リスクと思う状況とリスク評価(4段階)を記録用紙に記入するよう求めた。図版は参加者2名に対して1枚配布した。5分後、No.8図版を回収し、No.6の車いすの図版を配布した。参加者には先程と同様に、リスクの記述とリスク評価を5分間求めた。その後、No.6図版を回収し訓練フェイズへと進んだ。

2) 訓練フェイズ 福祉用具専門相談員からベッド付近で介助する際に起こりやすい事故や安全に援助するための視点に関する講義が約60分間行われた。その後、3班に分かれ、リスクコミュニケーション(以下、訓練)を行った。スタッフが訓練用のNo.12図版を各班に配布し、リスクと思われる状況の記述とリスク評価を個人で行った。その後、グループ内でそれらの視

点とリスク評価値を報告し合い、視点の違いをグループ内で共有した。最後に、発表形式にてグループ間でこれらの視点を共有したところ、計18種類の視点が抽出された。

3) ポストテストフェイズ プレテストで使用した2つの図版を再度用いて、新たに気づいたリスクをプレテストで使用した記録用紙の下部に追記するよう求めた。追加した部分がわかるようプレテストとポストテストの記述をマーカーで分離するよう求めた。回答時間はベッドの事例と車いすの事例ともに5分間であった。

結果と考察

各参加者がテストフェイズで記述したリスクの回答数を図1に示した。ベッドのプレテストでは計40個(一人当たり平均5.7個)のリスクを挙げ13種類の視点が抽出された。また、ポストテストでは計25個(一人当たり平均3.6個)のリスクが増え、3種類の視点が新たに加わった。ポストテストで挙げられた25個のリスクの内容をみると、訓練で抽出されたリスクと同じ視点の回答が12個と最も多く、続いて訓練で得た視点が般化したと考えられるリスク(たとえば、訓練で得たベッドの下の子どもに般化)が5個、講義で習った視点が4個、No.8図版オリジナルの視点が4個であった。

一方、車いすのプレテストでは計32個(一人当たり平均4.6個)のリスクが挙げられ、9種類の視点到分類された。ポストテストでは計14個(一人当たり平均2.0個)のリスクが増え、更に5種類の視点が加わった。

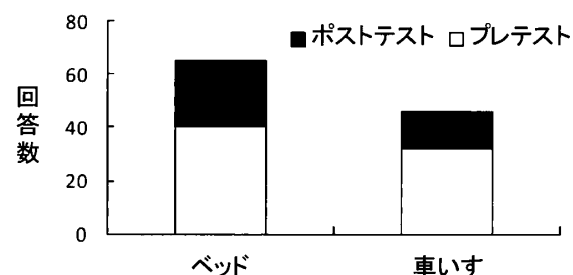


図1 各テストフェイズでの回答数

リスクコミュニケーションを行ったベッドの事例の方が、リスクコミュニケーションを行わなかった車いすの事例よりも、ポストテストにおいて1.8倍のリスクを挙げられたことから、リスクコミュニケーションがリスクを捉える視点を広げることに寄与する可能性が示唆された。今後は、講義のみを実施する群と車いすの事例で訓練を行う群を新たに設けることで、より詳細にリスクコミュニケーションの効果を検討することが求められる。